法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-05

三好十郎論(二):知識人とは何か

田中, 単之

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
19
(開始ページ / Start Page)
19
(終了ページ / End Page)
33
(発行年 / Year)
1967-12-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019205

好 郎 論

知 は

識 人と 何 か

間にばらまかれてあるのである。 とは考えにくい、かなり多くの作品が、 ととは、それはまた別な事がらであった。――という、はなはだ俗 見据え得たのであるが、かれ自身、そのような文学を生むというこ つまり、かれの内部と抜きさしならぬ緊張関係において提出された な言い方を、一応ゆるしていただきたい。「なんとなくいい気にな って」「演劇のために」書いた、とやはり言わざるを得ないような 評論家三好十郎の目は、バルザックの本質と文学のあるべき姿を 「幽霊荘」と「浮標」との

び、それらに支えられずして、三好の作品は一作も成立しない。し き者、しいたげられた者の怒りと悲しみと憎しみ、またその愛と喜 ろんこれらの作品に

三好の体臭がないなどというのではない。

貧し ごころ」(昭13)「寒駅」(昭13)「露路の奥」(昭14)― 逃げる神様」 (昭11)「賭ける女」(昭12)「無明一番槍」(昭13)「女 (昭10)「彦六大いに笑ふ」(昭11)「嚙みつい ーもち

> (「賭ける女一「女ごころ」は 小説であるから、 小説のために)かし、この場合、それに先行して、まず「演劇のために」がある。 ろで提出されてきていない。昭和10年は、三好のPCL入社の時期 進めない、息がつけない、生きて行けない、というギリギリのとこ 「何となくいい気になって」がある。これだけは書かないと、 田 中 単 之

かみとってくること。しかし、 熱」(昭12)に描き上げ、その文学魂の健在を証明してはいる。 かし、その文学魂とは何か? 現実の歯車から、命がけで真実をつ ムンする息苦しい熱気と共に、 な執拗さで、兄弟骨肉にからむ愛憎や、金銭にからむ執念を、 この問が三好の胸を嚙みはしなかったか。 もちろん、この期にあっても、三好は、まるでバルザックのよう つかみとってきて、 一屠殺場へ行く道」 何かある? (昭 11)

そうとしている危機がはらまれていたのである。

らみ合わせても、この時期には、三好十郎が一介のアルチザンに堕

であり、爾後四年間シナリオライターの職にあった。そのこととに

映画作品は、脚本や演出や演技等から支配される前にしかもそ

3

に就て腹を立てぬ者は映画作家たるの資格を持たぬ。 のいづれよりも強く商人と商法から支配されてゐる。そして此の事 をとられて、堕落してしまうようでは、それは初めから芸術家でな 立てて仕事を止してしまふ者も映画作家たるの資格を持たぬ」 襲ったものと考える。映画芸術をも含め、かれがとって来た芸術家 のもとに、この泥濘を歩いてきての、これは発言である。にもかか どなかったのだ(「映画の友」〈昭12年3月号〉)――とする考え 必要を感じたのだ。 とは芝居書きのことであった。芝居書きとは何か? この間にぶつ 道をたどること七年、思えば長いまどいの行程だった。リアリスト たのか、その問が、 れのしてきたことは何だったのか、それをしてきたおれとは何だっ のぼって、農民物三部作から「妻恋行」「幽霊荘」に対しても、 はもとより、 の道への根元的疑問。 も一つの考えではあろうが、今私は、もっと根元的な動揺が三好を しまう。やはりその泥濘の深さには耐えられなかったのだとするの わらず、この発言の後一年も経ないで、三好は、 バルザックによって、あらたなおのれの道を示されてよりその ひしひしとおしよせてきたはずだ。所詮は芝居書き! 〈昭和13年1月号〉)芸術家として、この程度の泥濘に足 かれは、 「屠殺場へ行く道」「地熱」に対しても、さらにさか 映画作家として四年間歩いてきて、今、 おのれの全容を、 いい気になって、演劇のために書いて来た物 「鏡」に写し出し、 映画作家を止して 同時に、 点検する かれの 転向 腹を お

りこんでくる蛭間は、作者のきびしい「倫理感」である――と、かLにおける作者の「生活」。その生活の中へ、すき間風のように入「鏡」には二人の転向者が登場する。御堂と蛭間。御堂は、PC

劇評論」「日本評論」「テァトロ」「婦人文芸」「文学案内」その 本映画」の評論をはじめとして、「早稲田文学」や「新潮」や た人間蛭間 だ」思想を捨てると同時に、根こそぎメチャメチャになってしまっ らうとして四苦八苦して来たのさ。眠れねえんだ。どうしても駄目 蛭間が住みつづけていた。「この五年間と言ふもの、 好はPCLのシナリオライター。 た」人間。 のだ。 たる自信、 他各種新聞雑誌に発表した数多くのこの期のかれのエッセイの堂々 い。二人とも、 って私は書いた。 「間違っていたと 気づいた瞬間 それをうっちゃる事の 出来 傲慢とさえ見えるゆるぎなさ、 御堂は転向の痛手をすこしも残さず会社社長となり、 ひとしく作者の分身なのだ。 (前出「会報」No.3)この考えは今も変って ただ三好の内部には、 それはまさしく御堂のも 前記「映画の友」 何とかして眠 もう一人、 、「演 いな 日日

俺あ、 事だ?」と、すでにマルキシズムを放棄した姿勢で答えてくる。 ている。 や強引に、ひきつづく御堂のせりふで、《民衆》と読ませようとし も迷惑をかけ、 ね?」蛭間はしかし「『階級』に『奉仕』するんだって? 人、とは、民衆、なのだ。 えてはくるが、やはりそのへん---《主人》とは何か、このせりふの範囲ではわからない。 俺あ犬だ、うす見っともねえ事をやらかしてしまって、 やっぱり主人の後について行く以外に行先がねえんだ」、主 「わかったよ。あくまで勤労階級に奉仕しようとするんだ 自分もみじめになり尽した犬だ。しかし、それでも (これはかなり難解なせいふであり、 、民衆、なのだ、 作者は、 主人に なんの

を定義して、「貧民窟で貧民達から手紙を書く事を頼まれ頼まれしかのバルザック論「打砕かるる人」で、〝芸術の英雄〞なるもの

行きたいのは、蛭間の徹底的な、失い、についてである。 書屋――おのれの姿にその代書屋を見た時、三好は敢然と、PCL さなった。自身貧乏人ではなくて、貧乏人たちの代書を務める、代をなす作品であろう。ただ、PCL入社後は、かれは貧乏人ではなだし三好も歩いてきた。「妻恋行」は、その意味でのこの期の頂点貧乏人」と言っている。まさにその道を蛭間は歩こうとしているのている内に、とうとう無料代書人にされてしまったところの一人の

ふ人間なの! たといふ人は、ホントになんといふ人でせう! 全体、どうい米子 (激怒)……あんたといふ人は、あんたという人は、あん

所へ来る、俺は芝居をやめ、 半年、君と一緒に芝居をした事もある。それから君と一緒にな やってつかまった。それから詫って出て来て、行き先きがない 学校を中途退学して王子で旋盤工をやっていた。量見ちがひを だが、なに、まだこれで一種の人間だよ。以上、僕の経歴が、 俺がメチャメチャになったのは君の責任ぢゃない、俺自身のせ ので、文化運動にでもと言ふんで、君達の新劇に入れて貰って 相成ったわけだ。ザッとそんなわけだ。見たところ幽霊みたい った奴を、御堂が拾い上げてくれてインチキ雑誌の編輯者とは いだよー って共同生活みたいな事を六カ月ばかり、それから君は御堂の 怒らなくてもいいよ。 誰一人ハナも引っかける者もなくて、ボロ屑みたいにな -彼方をウロウロ、 僕あ、蛭間荘六と言ふ人間さ。 メチャメチャになって---此方をウロウロ、神も仏もないも 勿論、 工業

君の気に入らないわけはないと僕は思ってゐるんだがな。

い。 失ったのだ。転向後の内部の混沌にあえぐさなかに、三好は、 想を捨てた者が、最後の拠点としたであろうところのものを る。人を愛するということ、愛されるということ、人を信ずるとい そのことで蛭間は再びたち上がることのできない決定的痛手を受け は、 格にスポットライトを当てることはしばらくおく。要するに、 居書き、の仕事であっただろう。そのことを悟った時、 うこと、信じられるということ――おそらくは、転向時、 間の、葉子への執念、鬱屈したドブドロの情熱、 はついに作家ではない、人間ではない。代書屋だ。かくてかれは、 らなかったはずだ。それがつかみとれないようであるならば、 えしてしまう事情は、すでに前章で見てきたとおりである。このョ る気になって、できないことは一つもない――を、根底からくつが かった。けれどもその死が、かれの信念―――人間一匹、ホントにや 自らの作家的、 いにしても、やはりかれの主観の上では、それに通う、 \Box 一人の女を失う。もちろん三好の場合、彼女の愛を失ったのではな 一度、昭和8年の、 火い の中から、 ョロの三好をPCLへ拾い上げた者は誰であったか、私は知らな 皮肉とも怨恨とも復讐ともなんとも名状しがたいネチネチした蛭 ーということばでは軽い、自らの魂と運命的な深さで結びついた 蛭間との貧乏生活に耐えきれず、御堂の妾となった女である。 ただそこでの仕事は、インチキ雑誌の編輯者の仕事とは言えな 人間的全エネルギーを傾けて「浮標」の製作にとり 自らの生きる姿勢をつかみとってこなければな あの決定的な、失い、の地点に立ち帰り、その 今、 蛭間のその性 彼は、 代書屋、芝 論理や思 一挙に 愛妻

かかるのだ。

ておかねばならない。 投影なのか、今軽々に論ずることはできないが、一応記憶にとどめく、この暗い、やりきれない復讐は、三好の精神のいかなる部分の思い込み、 葉子にも、 御堂にも、 その不安を 次第に植えつけて行の子供である。御堂家の一粒種。しかし、蛭間は、自分の子供だと とはいえ蛭間は、自分の 《失い》の中に精介を生みつけた。葉子

Ⅲ 「浮標」以後

――作家代書人の苦悩

1

はならぬ。 自らの宿業としての作家の地点につき出る「浮標」に至るまでの 自らの宿業としての作家の地点につき出る「浮標」に至るまでの 自らの宿業としての作家の地点につき出る「浮標」に至るまでの 自らの宿業としての作家の地点につき出る「浮標」に至るまでの に至るない。」(戯曲集「三日間」あとがき)と言う、この期の作品発表 だけで、その辺に放って置くだけである。発表したい気が殆ど起き だけで、その辺に放って置くだけである。さて、では「浮標」の地 三好の足どりは以上見てきた通りである。さて、では「浮標」の地 三がの足どりは以上見てきた通りである。さて、では「浮標」の地 と思ふ

> 峯の雪 夢たち 獅子 好日 三日間 おりき 俺は愛する をさの音 鷲の王峠 昭19年3月~(推定)(未発表) 昭16年5月脱 昭19年2月脱 昭18年(推定)(18年6月号「演劇」) 昭18年4月脱(18年11月文化座演) 昭16年7月脱 昭16年6月脱 昭16年1月脱 昭15年9月脱 (19年3月文化座演) (未発表) (17年10月号「演劇」) (18年7月文化座演) (18年3月文化座演) (17年7月前進座演)

三好に、「浮標」の正統が、どう継承されてあるか見てみよう。 この作品群の中で、「浮標」の直系――そのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――そのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――そのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――そのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――そのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――とのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――とのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――とのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――とのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――とのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――とのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――とのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――とのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――とのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――とのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――とのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――とのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――とのイッヒドラマ性を、この作品群の中で、「浮標」の直系――とのイッヒドラマ性を、この指述を表表して、この期の

びながら、しかし、自分の身体で、こいつの中をのた打ち廻って、「先づ、地獄だ。世間も、そいから自分の裡もだ。神よ神よと叫

思ひ捨てないで、毎日々々を、これきりだと思って、汗水を垂らし 獄ぢゃ無い。 此処だけだ。 此処に 全部あるんだ。 きゃ無い。地獄のほかに逃げ場所が有ると思へれば、そいつは、地 て行くんだ。 救ひが、 もし有るならば、 そいで、 実は、此処にし 廿四時の地獄だ

きて行けん人間も居るんだ。その仕事が文化的に尊といの尊とく無 業と言ふやつだよ。……業が深くって、書いて書き抜いて、どこま な目に逢ってもだ、或る一つの仕事の中に打込んで行かなきゃ、 で行っても、 戯曲の中に 自分をぶちまけて 行かなければ、 らしても、そいで、なぜよせんのか? わかるかね? こいつは、 よさん。よせないんだ。……あんな目に始終逢ひ、醜態の限りをさ いのと、そんな事は俺あ知らん。ただ、それをしないでは、どうし 「……そいで、ぢゃ俺はもう戯曲を書くのは、よすかと言ふと、 「馬鹿でもハーチャンでも、叩き殺されても、苦しくても、 苦しくて、どうにもヂッとして居れんからだ。」 居られない。……こいつが、まあ、俺と戯曲との関係だ。」 どん

も生きんとする立場を「浮標」において確立した三好は、その道を 選びとった三好。生きる地盤の徹底的な喪失の後に、その喪失をし 歩みつづけて、今またその道自体の限界状況に逢着したのだ。けれ その業を業として、三好がはじめて意識したのは、 考えることができない。まさに業としか呼びようのない生の様式。 ども、その限界状況の打開は、その道をつき進むことによってしか ついでのこの「好日」においてなのである。 自己内外の現実の地獄を生きる、その生の様式として戯曲作家を 「浮標」をうけ

> に答えてゆこうとするのである。外部を遮断して、この業にとじこ あ作家、この惨憺たる生よ。 もることの出来ない三好に、私はもう一つの業を見てとるのだ。あ けれども、その業の意味を外部から問われる時「三好」は、それ

佐田 すか? ……わからんなあ。すると、あなたのしてゐる事はなんで

三好 僕がしてゐる事?

佐田 そんな風に、文化は亡びなければならんと思ってゐながら あなたは、そいでも戯曲を書いてゐる。

三好 …… (虚を突かれて、ギョッとし、口をモガモガさせてゐ たが、やがてカックリと肩を落して唸る) 俺あ……まだ、俺なんか、駄目だあ。 うむ。 ……さうだ

佐田 ゃ、世話あ無いですね。 そいつが、しかし、人から人民戦線だとののしられてゐり

ts

三好 何とでも言ふがいいんだ。その内には……その内には、こ 見せる。 それまで、 何とでも言へ、 何と言はれたって、 俺に り、 の俺が、この俺こそ、チットは書いて見せる!必ず、書いて きわ物の時局便乗物は書けん! そんな事をして自分をいつわ や、自分の量見をひん曲げて、タイコモチの真似は出来ん! 折って、首でもくくってくたばってしまふ! それ以外の事な を軽しめ、日本を嘲弄する気にはなれんのだ!(殆ど号泣す ら、どんな苦しみでも俺あ耐えて行く覚悟でゐる。 るに近い)そんな事をする位なら、俺あ、このペンをおっぺし 今の時代に時めき、それに依って、此の、此の偉大な時代 しかしオベ

(頭をかゝえ、机の上に突伏してしまふ。背が波を打ってゐる)ん! それだけは耐えきれん。それだけは、こらへてくれ! ッカをしなければやって行けん苦しみにだけは、俺は耐えきれ

う。 前に、 もう一人の 弟子轟が登場し、 それとの会話で 「三好」は言前に、 もう一人の 弟子轟が登場し、 それとの会話で 「三好」は言せる!」 私にとって、こののび方が重要なのだ。この佐田の登場のてゆく。「その内には、この俺が、この俺こそ、チットは書いて見答え得ていない。答えようとあがきながら、答えはあらぬ方へのび答え得ていない。答えようとあがきながら、答えはあらぬ方へのび答え得ていない。答えようとあがきながら、答えはあらぬ方へのび答え得ていない。

れ。……大げさな言ひ方をするやうだが、それさ。」んけど、 無駄飯を 食べさせて置いてくれ。 ……生かして 置いてく…書けないかも知れない。……その間、一所懸命にやるから、済まかすると、何か少しは役に立つやうな物が書けるかも知れない。…て行く修業だと思って、やらして貰ってる。……その内には、もして戯曲を書くことを、自分と言ふ人間のヤワさを鍛へに鍛へ抜い「戯曲を書くことを、自分と言ふ人間のヤワさを鍛へに鍛へ抜い

為政者や軍部に対してとは、三好の場合考えられない。)う。(おしすすめて、第一線の兵士にも、とまでは考えられるが、中にある 国民大衆に対して、 と考えるのが、 いちばん 自然であろさせて置いてくれ。」とは一体だれに対する願いか? 戦時体制の「やらして貰ってる」とは、一体、だれから? 「無駄飯を食べ

えるために戯曲はある。そこで自分を鍛えるということが、あるいのために書いている自分を発見したのだ。まず、自分のヤワさを鍛「貧乏人の代書人」三好は、今や、たのまれもしないのに、自己

にはまり込んでしまっている自分。い。ただもはや抜きさしならぬ関係において、業として戯曲の深みは、 国民大衆のためになるかも しれないし、 ならない かもしれな

であった。

2

それを取巻き培っている国民生活全体、又、その全体の中軸となっかと思ふ。やっぱり、国民の一人づつとしての彼等の日常生活、又く、美しい。このやうな強さや美しさは、どこから生れて来たもの日間」のあとがきに、三好は言う。「わが兵士達の戦ふ姿は、強浮標」の次に「三日間」が書かれたのだ、と私は見る。単行本「三浮標」の次に「三日間」が書かれたのだ、と私は見る。単行本「三

てゐるものの深さ遙けさ、などを捜して行く以外に無い。」

て、 耐え得なかったのだ。 し、働いて、素朴に生きている者たちから疎外される苦痛にだけは には耐え得たし、 ある場合には、 それは 誇りでさえあった。 化人や文壇やまた劇作家志望の弟子たちから疎外される苦痛や孤独 聞であろう。「描くべき場面が変るたびに、その現場に一度いって 当時の報道や、火野葦平的文学や、少数の友人知人の兵士からの見 は、うかつであった。いや、やはり、あがきであった。権力者や文 みないと書けない性質がある」(「美しい人」あとがき)三好にし 見たか。戦場の経験も、戦闘の経験も三好にはない。おそらくは、 であったことか。 つかいになったのだ。「兵士達の戦ふ姿」を、三好は一体、どこで して対決し続けた三好が、国民大衆に対して、ここまで、オペッカ ああしかし、これは、代書人であろうとする何と悲しい、あがき 「わが兵士達の戦ふ姿」 を 「美しい」 と断定したと言うこと あんなにも、権力者どもや、文化人どもに毅然と しか

な時代を軽しめ」てはならない、というせりふにつながり、「戦争な時代を軽しめ」てはならない、というせりふにつながり、「戦争なりにも成就させてくれたものは、戦友であった。つまり、それは、りにも成就させてくれたものは、戦友であった。つまり、それは、りにも成就させてくれたものは、戦友であった。つまり、それは、工員の一郎、農民の恭助と、三日間すごす、その全き友情と連帯、工員の一郎、農民の恭助と、三日間すごす、その全き友情と連帯、「三日間」に登場するインテリ及川哲は、かれを取り巻く知識階「三日間」に登場するインテリ及川哲は、かれを取り巻く知識階

争だよ。」の発想につながってゆくものと考えられる。としての俺自身のためにも行はれてる。」「あらゆる戦争が永久戦は、なにも、国のためだけにやられてるんぢゃ無いんだ。」「個人

私は見てとるのである。 の兵士たちの心を心としようとする代書人としての三好のあがきを るのだ。ここでもまた、 志士と、尊皇思想を持つ農民との、美しい魂の交流が定着されてあ にすることはできない。ただこの作品を通してだけ言えば、尊皇の をかすめたのではないかと思われるが、それを今、文献的に明らか この期に、天皇中心一国社会主義というような考えが、 制ファシズムの思想とは明らかに異っているのであり、 される時、いささか撫然たらざるを得ない。けれどもそれは、 この作の主人公、終始肯定的に描かれる香月のせりふを通して提出 底した尊皇思想。三好から最も遠くあらねばならないこの思想が、 り。皇孫その天地万物を統制し給ふ所なり。 おかないだろう。「皇国、天神の天地を闢き万物を生じたまふ所な を肯定してしまえば最期、「鷲の王峠」へ突き出てしまわないでは とは言え、戦争は戦争である。いかなる形においてであれ、 「天皇陛下万歳」と叫んで死んでゆく庶民 即ち皇帝は(略)」徹 三好の脳裏 あるいは、

3

って浮かび上がってくるのは「峯の雪」である。この視点から、この期の作品群を見渡す時、最も重要な意味をも

策を口にする資本家や、その手先どもは、結局はそのことで儲けるは、国策の名において、碍子を作らせられようとする。しかも、国六十年間、芸術(陶工)の道一筋を歩みつづけてきた、名人治平

は、 う。生命の奥深いところで、業として結びついている芸術、今それ ことは二義的なことで、治平が、きっぱり焼物をやめてしまったの とは不可能である。 が外部の圧力で捨てさせられるのであれば、芸術家は、それを内部 の前に、 け加えるならば、「よごしてしまひたくない」とか何とかいう考え あろう。ただこの作品に描かれた重厚な治平像から、私の想像をつ で来た本業は、よごしてしまひたくなかとです。」というところに たく無いのです。数物や、おざなりの駄物ば焼いて、六十年打込ん 碗や壺で、本真剣にやる仕事が出来なければ、焼物は一切合切やり のであって、それを作る陶工たちは、極度に貧窮する。いや、その で守るよりほかに道がない。日々の痛みを耐えて、根は下へと伸び 根」を見るのだ。 やはり、甥で弟子の治六のせりふにあるとおり、「伯父には茶 と歌ったのは 壺井繁治であったが、 私は治平の内部に、 この ほとんど 生理的に その仕事が 不可能だったのだろうと思 根を伸ばしている者が、葉や茎で碍子を作るこ

ってであろうか。 治平のこの生理に変革がもたらされるのは、どのような事情によ

治平 みき、手を出して、み。

鉄。しまひに、くづれるの。 なになっちゃった。……冬になると、霜焼け。そいで叩くのがみき ……?(右手を出し、それから左手を出す)フ、フ、こん

馴れてからも、時時、とてもたまらなくなる事がある。ううみき、ううん。もう固まってしまってゐるから。……だけどね、治平、痛いか?(言ひながら娘の指の先を、いぢってゐる)

5 色く曇った窓硝子に鼻を押し当てて見るんだわ。ただでさえ寂 だわね――凄いの。お日さんなんぞ見えなくなって、室内では る。……すると、泣くの。すると、それが皆に伝染するの。 わに活けられたさざん花の方へ行く。デッとそれを見詰めなが の。……真白で、きれいだったわ。(治平の眼が、茶席の壁ぎ は……そう思うの。すると、フッと、内の峯の雪が見えて来る と真白い碍子が附いてる。それだけなのよ、見える物と言って 方へ続いてるのが、 先きはかすんで、 手前の一本か 二本見え しいところでね。何も見えないの。ただ電柱がポツポツ遠くの になってゐるんだけど、それでも砂ぼこりがもぐり込んで来て 真昼間でも蠟燭をともさないと仕事が出来ない。窓は二重硝子 中をグルグル虎の様に歩き廻る。……よく風が吹く― にかした拍子に、そいつが起きる。どうにも出来ないの。室の わ、その事を。みんな、時々やられるの。……春先など、どう もこうにも、たまらなくなる。みんなで、発作だって言ってた 地の事が頭に来る。……恋しいの、こっちが。すると、どうに ん、つらいとか悲しいとか、そんな事ぢゃないの。ヒヨッと内 一時間置き位に拭かないとタイプが利かなくなる。……その黄 ……泣いてると、そいで、いつの間にか、発作が治ってる。 電線が風で、ウーンと鳴ってる。その電柱にポツンポツン 聞いてゐる) ……そいから、 此の電線の向ふに 内地があ ……見てると、きっと、うちの事思ひ出すの。内でも今頃

(略)

みきは治平の二女である。芸術家の激しい気質と才能が父から遺

して、張家口に働いていたことが判明する。 して、張家口に働いていたことが判明する。 を陰影が刻まれてゆくのだが、ある時、東京の会社から新設計の碍にうわさされ、治六も弓子もそれを信ずる。そこに、この劇の複雑れて家へ帰ってきた。カラユキさんとしてすごしてきたのだと村人ちいり、恋を姉にゆずるべく家出。年月を経て、今、ヘロヘロに疲伝されてある。父の弟子治六を間に、姉弓子と苦しい三角関係におして、張家口に働いていたことが判明する。

味である。「先刻の外記さんみたいな負傷兵の人達の苦しさを、ホ なかったか。この場合、その大義の質や意味を検討することは無意 時代の大義に殉じようとする時、そこに日本の美が、重く輝きはし きが、苦しくも、その恋を内部にとじこめ、苦しめる同胞と共に、 く時にもたらされたはずだ。人並みはずれた激情家として生れたみ にも通い、日本民族の奥深い芸術の精神にふれてくる――の話を聞 苦しめる第一線の兵士・負傷兵に対するみきの献身が語られてある か、どうなってもいいの。……つまり、あの人達をホントに慰める 出来る事なら、私に出来る事なら、この私の身体で間に合ふ事なら ンのチョットでも忘れさせてあげる事が出来るものなら、……私に のである。治平のみきへの愛は、もはや単なる父の愛ではなく、不 ことどうでもよくはなくって?」これより早く、外記との会話で、 から、そう思はれても、別に腹を立てる気にもなれないわ。そんな ……どんなことでもしてあげたい……そんな気がするの。 重く美しく語られる張家口の碍子——それはさざん花の活け花 設問に かえって、 治平の生理の変革は、 このみきによっ からゆきさんになってもいいと言ふ気がするの。……だ 自分なん

きた碍子の青写真をとりあげ、轆轤をまわす。 常祖と今、激しく触れ合ったのだ。「私の身体で間に合ふ事なの精神と今、激しく触れ合ったのだ。「私の身体で間に合ふ事なの精神と今、激しく触れ合ったのだ。「私の身体で間に合ふ事なら」「自分なんかどうなったっていいの。」かくて治平は、出征する茶の弟子新吉を、自らの内部の痛みを耐え抜き、より苦しめる者たち憫さではなく、自らの内部の痛みを耐え抜き、より苦しめる者たち

にし、今、治平が、同じく日本の美を追い求めて、碍子を作ること らの恋を苦しく内にとじこめなければならなかったみきが、その肉 遮断し、美の女神のどれいと化する時、いかにその姿勢を宿業と名 は谷崎の姿勢の中に、芸術家の苦悩を見ることができない。外界を 業のきずなは二重であり、その強さは、二倍であるかに見える。 て、治平は谷崎に劣るもの、と人は言うであろうか。私には治平の となった。 芸術と結びつけられたその 宿業の きずなの 強さにお 体を、兵士たちに与えたとして、私たちはそこに、どのようなみき たない芸術家を、私は芸術家と見ることができない。たとえば、自 づけようと、そこには恍惚があるだけである。恍惚の表情をしか の代書人たるべく運命づけられた芸術家の苦悩。 的表情。ついに美の女神のどれいとはなり得ず、苦しめる人間ども とめることを除外しては、自らの芸術を発想し得なかった者の悲劇 はそれを見る。同胞の思想と感情と運命を、その内奥においてうけ の表情を見ることができるか。碍子の轆轤をまわす治平の表情に私 谷崎潤一郎が、その「細雪」の故に、芸術的抵抗者の栄誉を専ら

についてである。

して、 集に応じることを拒んだために憲兵隊にあげられた青年の話」を聞 代書人でありさえすればいいのか。この問が、激しく三好の胸を襲 って、 単純さから最も遠い存在であらねばならない。全人類的な立場に立 得たものが、何故に支那の庶民の心を心とし得なかったか。 のを噛み殺して行く動物のような単純さ。 れた相手の立場には、ついに一顧も与えない。対立するすべてのも 間」のインテリ哲にしても、支那の少年兵を突き殺した瞬間から、 しない。戦争という現実の中にうめき苦しむ庶民同胞の心を心とし スト教の信条をそのまま素朴に、そして厳格に守るために軍の召 たのは、おそらく、終戦近くに、あるジャーナリストから、 「聖戦」ということを口ばしるところにつき出てゆくのだが、殺さ 知識人とは何か、という、そのこまごまとした定義は今は必要と 三好は、この能力に欠けた。 作家として存立できるものであろうか。 戦争とは何か、を発想し得る能力を持つものだけが知識人で しかし、この能力に欠けて、 知識人とは、このような つまり、作家とは、 三三目 果

かされた時においてだったろう。

き「)
たような感じがした。」(河出版作品集「その人を知らず」あとがしたいろいろの事に、一気に焼ゴテを当てられて血が吹きだして来したいろいろの事に、一気に焼ゴテを当てられて血が吹きだして来戦争中へかけて、自分が戦争というものに就いて考えたり感じたり戦争中へかけて、自分が戦争というを受けた。それまで、戦争前から「その話から私は強いショックを受けた。それまで、戦争前から

でも居たのだったら、その死顔に対してだけでも、責任とか何とか 小林の言う『愚かなる』青年が居なかったでしょうか? にたゝみ、それを一つのバネとして戦争を肯定して死んで行った、 付け』に役立った気合の声の響がたしかに在った(略)その響を胸 の中に日本人の或る人たちを戦争へ向って前向きにさせたトキの声 所論について」(昭26)で、「戦前から戦争中に於ける小林の仕事 の響、又は戦争に向ってやむを得ず前向きにさせられた人々の『気 ないか。戦後、その小林秀雄論「文学に於ける政治-う実に簡単な論理をさえ見失った、いわば知識人としてはゼロの自 とかではなく、客観的に作家は知識人以外の存在たり得ないのでは 分に逢着したのだと私は見る。作家は代書人である前に、まず知識 まかには認めざるを得ないし、その結果「人を殺すのは悪い」とい 人であらねばならないのではないか。否、あらねばならないとか何 して、いわばそのムードのまにまに動いてきたかれの姿を、まず大 も不明である。不明ではあるけれども、以上見てきたかれの作品群 したがってまた「血が吹きだして来たような感じ」の内容について 的にどのような事であったのか、作者によって説明されておらず、 からは、戦争協力ムードにすっぽり首まで埋まった庶民の心を心と 戦争について考えたり感じたりした「いろいろの事」とは、 ――小林秀雄の

い。 では自身に向って、いっそうはげしくつきつけたところのものであった間に問いつめているわけであるが、つまり知識人としての責任を、結省などしない」という小林の発言の重さに十分な理解を示しながら度への反省)を聞かせてもよかろうと思うのです。」と、「私は反むずかしい事では無く、小林はそれ(戦争に対してとった自分の態

の歩みであった、と私は見る。して知識人たり得るか?」この問に対する格闘が、三好十郎の戦後に、あらたに知識人の問題が屹立してきたのである。作家はいかにかくて、作家として立ち、代書人として歩いてきた三好十郎の前

Ⅳ戦後

−友吉→佐山→ゴッホ→「私」の行程

1

で、知識人の問題を考えてみたい。前記「その人を知らず」のあとがきの引用をもう少し続けること

京空襲が激しくなり、私の身辺も忙しくなって、その青年に会うこしたが、憲兵隊では外部の人に面会はさせまいと言う。そのうち東「私はその青年に会いたくなった。その由を、その新聞記者に話

間、 要素が含まれている。それはいくら説明しても、 づいたのだ。/怖いという気持の中には実にさまざまの複雑な深い ると妙なことに、私はその青年に会うのが怖くなっている自分に気 まって切り離すことが出来なくなってしまっていた。 のいずれにしても、この青年のイメージは私の心にへばり附いてし 青年を心から愛した。又時によって歯を鳴らすように憎んだ。時に 時によって耐えきれないように醜悪に見えた。時によって私はこの 時期の、いろいろの事態と気分の中に、その青年のイメージが度 中でサツマ芋の葉を煮て、その変な味のするやつをゴソゴソと噛ん 襲最中の一瞬後には自分が粉みじんになるかもしれないと思うセッ *t*s, イと気がついてみると、私は現実のその青年にはまだ会っていなか の生物のように遠々しく無縁のものに感じられることもあった。そ しいものに感じられることがあるかと思うと、時によって他の遊星 よってまるで自分の兄弟――というよりも自分自身――のように親 あらわれた。/時によってそれは実に美しい姿に見えた。 でいる自分の前に、モーロウとその青年の姿が立ったり……けわし ナの中に、キラッとその青年の眼が見えたり、 みた男のようにも思える。ハッキリと想い描くことは出来ない。空 ったのである。私は私の中の青年——私が永い期間にわたって自分 い、つらい、やりきれない事が後から後からと突っかけて来たあの となど到底不可能な状態になった。そして、やがて終戦。……その 中で結晶させた青年 ―― を見ていたのである。 それで、 普通の青年のようにも思えるし、何か恐ろしく異様な、 実際のその青年を捜し出して会ってみようかと思い立った。す 始終その青年のことが頭へ来た。どんな男だろうと思う。 終戦前後の食糧難 説明したりない。 **/そしてヒョ** しかし又 も う

に書いてみる事しか無いのである。それでこの作品を書いた。」ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このような場合に、私に出来ることといえば、その事を作品ない。このようない。

だ。 未練な物の言い方はしない。やはり、この「怖れ」は複雑だったのれている」「いくら説明しても、説明したりない」などという卑怯か? もしそうであるなら、決して三好は「複雑な深い要素が含まの前に立つことで、徹底的にあばかれてしまう、それをおそれたのらか。自らの戦争に対する態度のあいまいさ――弱さが、この青年以上が、その全文である。三好は一体、何が「怖」かったのだろ

(「抵抗の姿勢」昭27)姿勢を、その憎むべき要素のままに、かれき、「日本戦力の増強のためのボタンの一つを握って立っていた」は、そのようなことはゆるされない。愛すべき自分の本質を、そっな首むのであろうか。たしかに、浅い日常生活の中においては、そ愛すべき要素と、憎むべき要素に分け、その一方を愛し、もう一方愛すべき要素と、憎むべき要素に分け、その一方を愛し、もう一方愛すべき要素と、憎むべき要素に分け、その一方を愛し、もう一方愛すべき要素と、憎むべき要素に分け、その一方を愛し、もう一方では、のよりは、

治子がいるけれども、彼女も、兄人見の宗教に絶望し、身をダンサ は、 るのである。 よりも何よりも、かれを大衆から、徹底的に孤立させてしまってい ズムであるとするきびしい視線を注ぎつゞけているのであり、それ えたる野良犬として荒野にほおり出すという劇の結末もさることな 光を、そのままに憎んでいくのである。それは、この栄光者を、 く友吉については、もはや論ずる必要もなかろう。三好は、 立ち得たという意味で知識人なのである。その知識人たる栄光に輝 り、時計修理工であり、特別の知識も学問もない。ただ「汝、 なるアウト・ロウ貴島によってしか支えられない友吉。もう一人、 容しがたい友吉が浮彫られる。アウト・ロウと言えばこれこそ完全 っぱらってくる時計や食物を受け取らされる、ミジメとも何とも形 がら、劇の進行中において、友吉の強固なる意志を、一種のエゴイ 勿れ」のキリスト教の信条をそのままに貫くことで、人類的基盤に 友吉は、普通言う意味で知識人ではない。単なる工場労働者であ わずかにスリの貴島ただ一人なのであり、彼が、どこからかか 戦中(獄中)戦後を通し、友吉を支持しているもの

として、疎外者友吉への共感なのである。とれの、憤りと同情と敬意と親しみ、いわば、自らもアウト・ロウなく、高く貴い精神を持ちながら、世の何ぴとにも認められないこうとしているのでもない。友吉を見つめる目は貴島のそれと大差は味で、友吉の精神につながろうとしているのでも、女として、愛そーもしくは、それ以下におとそうとしているのであり、まともな意

分がですねえ――つまり自分の国が、いくらそんな気もちになって るが、その発言は、 士気を 鼓舞するどころか、 その逆のものとな 木山が深い理解を示してゆくのだが、 ずだ。けれどもしかし、細田が友吉と真に結びつくということは、 深い孤独を、その深さのままに、細田は完全にキャッチしているは 吉を、細田がジッと見まもっている」という幕ぎれで、友吉のその がストに突入しようとしている集会に招かれ演説する。次に司会者 から出てきて、まだ体調も整わぬままに、今、友吉の会社の労働者 ついてしゃべらせられて行くのだが、そして、この時もただ一人、 カ人(帰化人)木山と友吉の間にも見ることができる。人見の教会 **う、そのことも細田にはわかっていたはずだ。同様の関係をアメリ** で説明してみても、 決してないだろう。ストライキという闘争手段を、どのような方法 かしそうな、そして悲しそうな眼つきで見まわしている顔。その友 共産主義者細田の、友吉へ注ぐ目を見てみよう。細田は戦後、 細田が支えて、自分のイスにかけさせる。「一同の方を、 俗物どもにとりまかれ、この時もむりやり友吉は、戦争否定に 友吉を、軍に対する抵抗者として紹介し、むりに演壇に立たせ ついに労働者たちの 罵声にやじり 倒されてしまう。 その友吉 友吉を肯かせることは、 ついに 不可能であろ 結局は、 「しかしですねえ自 獄

る。ですか?」という思考で、 友吉と すれちがわざるを 得ないのであけの意見を押し通そうとする場合は、それでは、どうしたらよいのもですねえ、向うの相手が、相手の国が、あくまでガンコに自分だ

かくて友吉は、その知識人の知識人たるゆえんは、

何ぴとにも理

は、何と美しい愛情を友吉に注いでしまっていることか、は、何と美しい愛情を友吉に注いでしまっていることか。品「その人を知らず」を書き、一つの信念を守ることにおいて示さのである。三好は、その愛と憎しみの混沌と分裂を統一すべく、作解されることなく、ただ一人三好十郎によって理解されようとする

その大衆放棄も、もともと友吉は普通の意味での大衆指導者として 疎外者の行程、その全重量を、友吉に重ね合わせているのである。 アナーキスト、 そのような論理を越えて、なお聳え立つ友吉が描かれてあるのであ 代社会の論理としてほとんど体をなしていないのであるけれども、 どせずに、そこは何とか話し合って」などという友吉の発言は、近 吉は打砕かれざるを得ないのだし、工場労働者に対して、「ストな あるのである。 てのそれであり、三好はここで、おのれの孤児としての生い立ち、 る。その描き方は、たしかに、多分に貴島や治子の目によりかかっ がりも、結局は、大衆指導者細田によって、 の知識人としては設定されていないのだし、その大衆からの浮き上 友吉の足下へも及ばない矮小な人物が、巨人友吉に喰ってかかると いう、いわば、その批判は戯画としてしか出されていないのだし 独善とエゴを追求するのは、俗物人見であり、つまり人間 つまり— マルキスト、 ー論理としては、人見の発言は正しく、 転向、 戦中の迫害、その自らの歩んだ あたたかく見守られて

そのようなところにあるのではない。にはとらえることができる。けれども、三好の友吉への真の愛は、――と、以上、この作品に底流する三好の友吉への愛を、表面的

たという事実に対して友吉は何をしたか。 「君が実行したために、君のお父さんは 死んだ。 明君は 苦しん 「君が実行したために、君のお父さんは 死んだ。 明君は 苦しん 「君が実行したために、君のお父さんは 死んだ。 明君は 苦しん

唯一回だけでも、よい加減苦しい。その一つ一つの事が自我の全部 疑惑し、混乱し、格闘し、消化し、同化し、統一する。この回路の て存続しつゞける者のことだ。」(読売新聞昭29・11・11)と言 出せず、それに耐えて病的なノイローゼにはならず、自分の属して 会報」№35で詳述した)三好の真の愛は、友吉のこの徹底的な《失 の回路の出発点はその前の回路の到達点から始まるのだから、一回 をあげての活動だからだ。その回路を一度だけでなく、三十度だけ と」(「群像」昭30・1月号)において言う。「認識し、受容れ、 いる社会全体をどんな種類の絶対主義にも渡さぬための抗毒素とし 知識人とは、たえずノイローゼにおびやかされつゝも、どこへも脱 い、 さらに、 「知識人のよろこばしい 本務とのろわしい 運命のこ い、に対して注がれるのだ。三好は後年、知識人を論じて、 自らの、神、を捨てるのである。(その事情は、すでに、 一回とすべてが高度になり困難になり苦しくなる。一番苦しいこ 無限に繰り返して行くことだ。しかも、いつでも、この次 「真の 前出

運命とでも言わなければ言いようがあるまい。」を当のインテリ自身が知っている点だ。これは実に無残に呪われたらわきにのがれる事が出来ないと云うことだ。しかも、それらの事インテリがインテリでありつゞけるならば、その永久運動の回路かとは、それが果てしなく続いて終る時が無いと云うことだ。つぎに

作品において、友吉は、クリスチャンとしてスタートする。いわない。

る) がさがってくる。ホントの苦しみが、はじめて彼の顔に現われがさがってくる。ホントの苦しみが、はじめて彼の顔に現われ友吉 ……(北村の言葉をジーッと聞いている間に、だんだん頭

る。「アメリカにお願いします!・ソビエトにお願いします。両方れ、神を疑惑し、――とでも言えようか、ついに混乱の果て絶叫すらの ドグマのもたらしたものを 認識し、 人見その他の 論理を受容らの時点から、三好は友吉を、知識人の「回路」へつき放す。自

われは、どこにみればいいのだろうか。 とも、ケンカをやめて下さい! 両方で、もっと仲良く話し合ってとも、ケンカをやめて下さい! 両方で、もっと仲良く話し合ってとも、ケンカをやめて下さい! 両方で、もっと仲良く話し合って

見えない友吉の妹俊子は免れるが、トラックの上から呼びかける。しげな夜の仕事のために、体をこわしてしまっている治子と、目の貴島や、浮浪者や、夜の女と共に友吉も積み込まれてしまう。あや最後の第11幕を見てみよう。警察のかりこみのトラックに、スリ

若い女 ホホホ!

男A フフフ、ハハ!

んから離れないで――いいかい、頼んだよ!く)俊子! 気をつけて! 気をつけて行くんだよ! 治子さ友吉 (その自分のコッケイなミジメな姿を顧慮している余裕な

「いっしょうけんめいに、なんですから――」のせりふに、男女

りであり、もちろんそのような感情も、ほのかに流れてはいるけれ の間の愛情の吐露を見てとることは、作品の流れの上から、 見えていたのだろう。けれども人見は、少なくとも彼に神を媒介し 友吉にあっては、神との格闘だけが問題なのであって、その他は眼 を亡ぼしつゝあるかについては一願も与えないのである。もちろん あり、したがって、治子が何故にそこを去り、あやしげな仕事で身 それであろう。それよりも、ここで問題にしたいのは、友吉と先生 ど、それを含んで、もっと大きいところでは、やはり、隣人愛的な 私には考えられる。 た人物である。それとのかかわりあいなくして、真に人間的次元で 中になく、人見も治子も、ひとしく、不幸な、かわいそうな人間に 人見との関係である。人見の俗物性に対しては、友吉は全く音痴で あろう。友吉が、神との格闘を通し、その意味を消化し、 のだけで、果たして治子は兄のもとへ帰り得たか? おそらく否で の格闘が可能であろうか。仲よくしてほしいという祈りのようなも 統一するとすれば、まさにこの人間的次元においてだったろう、と ややむ

であったのだ。まった。そして友吉が残した行程を歩いて行くのは、三好十郎自身まった。素朴な、と言えばあまりに素朴な地点に友吉を立たせてしまった。素朴な、と言えばあまりに素朴な地点に友吉を立たせてし三好は、友吉を、この時点で、知識人の回路から、そらさせてし

いきにも似た愛情を友吉に注ぐことで完結した。 (未完)て「その人を知らず」を書き、今、かかる結末において、深いためともあれ三好は、片倉友吉への愛と憎しみの混沌を整理せんとし